

ホタル

6月は梅雨の季節だ。虫は雨だと葉っぱの裏などで雨が止むのをジーと待っている。晴れると一斉に動き出すので、雨の合間の虫ウォッチングは楽しい。私には幼い頃の思い出がしっかり刻まれている虫がいる。黄昏時に光り始めるホタルだ。家族で近くの川に出かけ、ホタルの光を追った。帰りは一升瓶にホタルを数匹入れ、蚊帳の中に放し、ホタルの光を見ながら眠った。暗い帰り道、田んぼで光るホタルを見て心が和んだことなど。ホタルの光は、人の心を癒す効果があるのでは？と思う。

山下美佐子(東金市)



ゲンジボタル
カワニナだけを食べる



ハイケボタル
淡水生の貝などを食べる



クロマドボタル
幼虫が光る



クシヒゲベニボタル
光らないホタルの仲間

見られなくなった生き物

以前、庭のトウネズミモチとそれに絡まるツルウメモドキをたくさん切ったら枯れてしまった。以来、それを食草とするヒロオビトンボエダシャク（昼間にひらひら飛ぶのでよくわかる）とキバラヘリカメムシの姿がみられなくなった。ツコムシ、クダマキモドキ、ウマオイの声がいつからか聞こえなくなった。あちこちであたりまえのように見られていた成虫越冬のツマグロオオヨコバイの姿が、3年前から庭では見られなくなった。くりくり目玉の可愛い幼虫の姿も見られない。

加曽利貝塚では4年前の大きな台風で、ヤマザクラやコブシ、キリの木が倒れ、クヌギの枝がたくさん落ちた。その前から、道の周りのクヌギやコナラの木が切られてきた。道路にハイイロチョッキリの仕業のドングリ付き枝がたくさん落ちていて心配したが、それがなくなった。さぞかし見られる生きものの姿が変わってきたかなと思っていたが、8年前の生き物の記録と今を比較すると、個体数は変わるかもしれないが種類はあまり変わっていなかった。（クヌギカレハ幼虫は見られなくなった。）加曽利貝塚の公園だけでなく、周りの雑木林や田んぼなどがあるので回復力があるのかもしれない。それでも今後さらに公園化が進み、地下の埋蔵物を守るためにたくさんのお木が切られていくので、色々と変化があるかも……。今年の6月の観察会で、下の写真のような加曽利のきれいどころがみられるといいと思う



松本 美千代 (千葉市)

キビタキが増えている

キビタキは写真の通り姿が美しく、囀りもピッコロを奏するような明るい歌声で、日本の3鳴鳥といわれます。東南アジア方面で越冬し、日本には春に渡来して繁殖する夏鳥です。

私がバードウォッチングを始めた30年前の話では県内の清澄山系に少数が繁殖していると聞き、何度か通いましたが、一度も確認できませんでした。

どうしても見たかったら軽井沢とか北海道とかに遠出するしかない憧れの鳥でした。

ところが20年ほど前から県内でも囀りの声を聴いたという情報が飛び交うようになりました。

当時の考えでは恐らく渡りの途中で立ち寄ったものが鳴いているだけだろうというものでしたが、その後も目撃情報は相次ぎ渡りの時期を過ぎた6月にも声が聞こえるので、繁殖していると思われます。



先般は清和県民の森方面でちば千年の森をつくる会の公開行事を開催しましたが、案内している頭上で盛んに囀っていました。佐倉市の竹林ではクマガイソウ保全の整備作業中、駐車していた軽トラに衝突して動けなくなったので暫く見守っていたら元気に飛び立って行きました。幸い軽い脳震盪を起こしただけのようで安心しました。

それだけ普通の鳥になった気がします。元からの生息地でも増加傾向に変わりなく浅間山麓にある妻恋村の別荘地で

は車道脇でも簡単に見られました。野鳥写真のグループで撮影旅行をしましたが、あまりに多いので仲間からスズメ並みだと冗談が出るほどでした。写真は2枚ともその時に撮影したものです。

なぜ増えているのか？ 以下はNPO法人バードリサーチの記事からの引用です

○個体数の変化

1990年代後半は全国的に夏鳥が減少し、東日本を中心に亜種キビタキの減少も報告されている。ところが

2000年代に入ると、キビタキの個体数が増えているという声が全国的に聞かれるようになった。なかでも山口県では、1980年代後半から2000年までに繁殖分布が6.1倍に増加した。個体数の増加の原因は定かではないが、キビタキは主として枯死木にある入り口の広い半開放性樹洞を利用して繁殖し、こうした樹洞は管理された植林地では少ないことから、林業の衰退や里山の放棄によってキビタキに適した営巣環境が増えたことが要因のひとつであると推測される。実際、放棄竹林が営巣環境として利用されることで、西日本において新たな繁殖地が成立した可能性がある。



佐倉市

坂本 文雄

人はどうして花が好きなのか

小坂 裕子

長年、謎に思っていること。「人は、いつから、どうして、何のために、花が好きになったのだろう」を6月号のテーマにしようかなと呟いたら、隣にいた夫に「俺は花に興味がない、人間、全員花が好きとは限らない」と言われてしまった。大昔、新婚のころ結婚記念日に饅頭を買ってきて、花なんか買ってきて食べられないだろうと。夫のように、花に興味のない方も多いと思いますが、日本全国、世界中どこでも、お祭りやお祝い、冠婚葬祭に添えるのは花が中心。紅葉したモミジやイチョウも綺麗なのに花嫁のブーケには使わない。赤ずきんちゃんは、おばあさんのお見舞いにお花を摘む寄り道をしていてオオカミに狙われました。種を買い、時間を割いて世話をして花が咲いたら、チョウのように蜜を吸うわけでもなく、生きるために必要のない努力を、人はいつの時代から始めたのか不思議です。

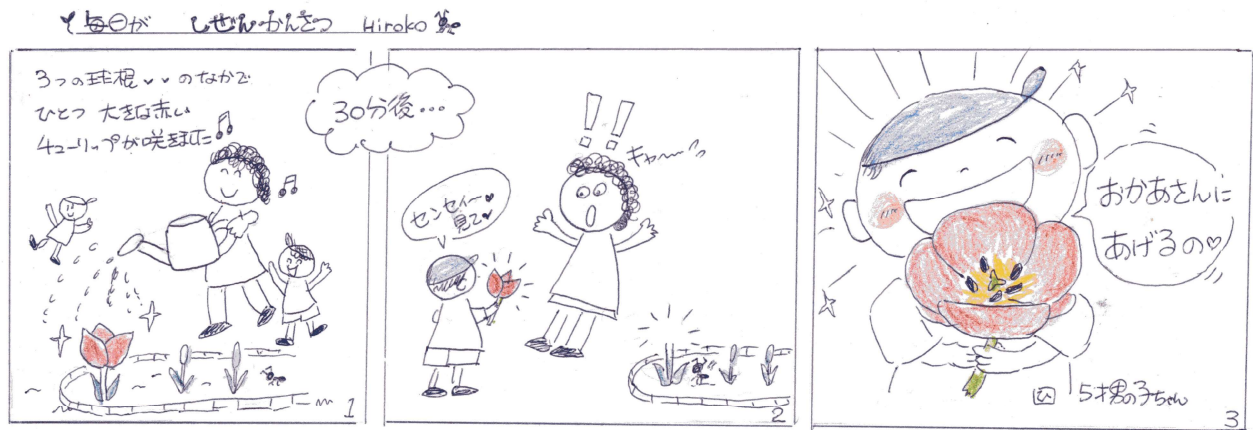
3, 4才の子は、花が痛まないようにティッシュペーパーで包み。5, 6歳になると少し男女差が出てきて女の子中心ですが枯れないようプリンの容器に水を入れてから花を大事に入れて、そして、どの子も満面の笑顔で、言うのです。

「お花、持って帰りたい。おかあさんにあげるの♡」

子どもたちは、本物の花がなくても、お母さんやお友達、大好きな人の周りにお花もたくさん描きます。「ママはお花が好きなんだよ」「〇〇ちゃんを可愛くするんだ」と言いながら一所懸命に楽しそうに描きます。帰宅した子どものポッケからティッシュにくるまれた萎れた花が出てきたら、お子さんが大切な人を思い、喜ばせようとしたことの証です。

カワセミのオスはメスへ魚のプレゼントをしますが、人間の私は魚よりも饅頭よりも心のこもった花束が欲しかったな。人間にとっての花の存在はやはり不思議に思えます。

先日、大切な友人を亡くしました。彼女のことを思いながらお花屋さんで自然とヒマワリを選びました。いつも笑顔で明るい彼女に会うと、いつのまにか悩んでいたことも忘れ楽しい思い出しかありません。太陽に向かって神々しく咲くヒマワリのような人でした。



子どもたちとの実際の出来事を漫画にしています。

数個だけの球根のうち、大きな赤いチューリップが一番に咲き、皆と眺めた後、園庭で遊んでいたら、笑顔で花を見せにきた男の子。瞬間思わず、ガッカリした声を出してしまったのですが、嬉しそうなお顔とその言葉に、ガッカリ声を出した自分を反省しました。隅に咲く草花は摘んでOKで花壇の花はダメという違いが難しいのですが、公共のマナーを知ることにもなるので、花壇の花は誰かが大切に育てて皆で見て楽しむものと伝えていきます（正解は何かとも思いながら）。

植物雑感『アジサイ』：紫陽花。アジサイ科アジサイ属・学名は *Hydrangea macrophylla*

学名は以前はユキノシタ科だったが、現在の APG の分類ではアジサイ科になった。一般の人には分かり易くなったと思う。アジサイは日本が原種のガクアジサイから改良した園芸品種である。6 月から 7 月に開花し、白、青、紫または赤色が大きく発達した装飾花をもつ。ガクアジサイでは萼が花序の周辺部を縁取るように並び、園芸では額咲きと呼ばれ、花序が球形ですべて装飾花となったアジサイは、手まり咲きと呼ばれています。多くの品種が作り出されており、「モナリザ」とか「ダンスパーティ」とかビックリするようなアジサイとは思えないほどの名前があります。こんな名前ならうっとうしい梅雨の季節も花の美しさと共に晴れやかになりますね。

アジサイは鎌倉のお寺が有名だが、去年は NHK で長谷寺にある色んな種類のアジサイを女優の鶴田真由さんの案内で専門家と共に詳しく説明していた。千葉では麻綿原高原のアジサイが有名。古く万葉集にも詠われている。『紫陽花(あじさい)の八重咲(やえさ)く如(ごと)くやつ代(よ)にをいませわが背子(せこ)見(み)つつ偲(しの)はむ』 4448 ・ 橘諸兄(たちばなもろえ)の歌。

意)八重に多く群がり咲くように。いつまでもあなたさまも末永く元気でいてくださいと願ったもの。アジサイの名前については、あづ(集まる) さ(真) あい(藍)を合わせた言葉で青い花が集まって咲くところから生まれた語とあります。別名に花の色が変化するから七変化、または八仙花、四葩(よひら)は四枚の花びらの意味で使われている。

アジサイを初めて世界に紹介したのはオランダのシーボルトでドイツのツッカーニーと共同で出版した「日本植物誌」である。シーボルトは元々はドイツの医学者、博物学者だが文政 6 年(1823)にオランダ商館の医師として、日本の長崎・出島に着任した。長崎奉行の許可のもと鳴滝塾を開いて、高野長英ら日本の各地の医者に医学を教えました。シーボルトは長崎出島にいる時に丸山引田屋の遊女の其扇(そのぎ)を妻としていた。其扇は名を滝といい、彼はいつもお滝さんと呼んでその発音は「おたくさ」でした。二人の間には娘が生まれ、その名をイネと言った。この娘はシーボルトの門弟の二宮敬作などが面倒をみたりして育て医者道に進む。一時はシーボルトの門人で岡山の産科医の石井宗謙と結婚して一児を産んだりしましたが、医学の志高く、宇和島藩で村田蔵六やボンペなどに学び、名前は志本いね(しもといね・姓はシーボルトを漢字にしたもの)でしたが、その後、母姓の楠本を名のり、楠本イネになる。イネは明治 3 年、東京築地一番地で産科を開業する。日本最初の女医者になった人です。吉村昭の小説「ふおん・しいほるとの娘」に詳しく書いてあります。シーボルトはアジサイ類を好み、この花にずいぶん感動したようで、自分の愛した妻のお滝さんの愛称である「おたくさ」をオランダに帰ってから出版した日本植物誌でアジサイの学名に *Hydranger otaksa* と命名しています。種名のオタクサの意味は久しく誰にも分からなかったが、後で愛妻の名、おたきさんであることが明るみに出て、日本の植物学者連をアツと言わせたとのエピソードが残されている。学名秘話というより、まさに学者艶話といったところであろう。最初オタクサとは草の名前か何かと思った日本の植物学者こそいい面の皮だったと、本田正次の書「植物学のおもしろさ」に書かれています。



(現在の学名は先につけられた *Hydrangea macrophylla* が使われている)

小島紀彦 (我孫子市)

シュロを観察してみると

4月28日に大津川緑道を歩いた。シュロの雄花が花盛りで、大型の苞から30cmにもなる黄色い円錐の花序が出て、手で触ると花粉が飛び散った。シュロはヤシの木の仲間であらゆる年輪がなく、雌雄異株、風媒、鳥散布とある。



5月11日にはもうその雄花

は枯れて褐色になっていた。今度は雌花が開き始めていて雄花序同様大きな花序だが、こちらは垂れ下がらず上に伸び、淡い緑がかった黄色い花。雌花序には雌花と両性花があるとのこと。冬には黒い種に。

種からの芽生えはまず 細長い葉が一枚です。そのうち2枚3枚と葉っぱが生えてきて(写真1)、やがて小さいながらもシュロらしい葉っぱになります。かなり大きな葉っぱが出るようになっても幹を上には伸ばさず、地中で増殖をして太さを増していくという(写真2)。地中で充分太くなって、シュロの幹の太さ(径10~15cm)になると初めて増殖する部分(成長点)を地上に出します。その後 幹は太くならず、上へ上へと成長していきます(写真3)。変わっているのは、「枝を出さず、幹をまっすぐ上に伸ばし、幹はもう何年たっても太くならない」というところです。枝を出さなくても大きな葉を、十分に日光が当たるところまで伸ばせるのです。その秘密は葉柄にあるのではないのでしょうか。シュロの葉柄は細いですが固くてとても丈夫です。断面は三角形で、三角形は同じ断面積なら最も強い形で、長さも長いものは2m程と、とても長く伸ばす事が出来るのです。



シュロの葉は、幹の先端の中心から生えてきます。円形で直径50~80cmもあり、掌状に深裂し、古くなると裂片の先が折れて垂れ下がります。この葉は頑丈な性質をしており、さまざまな用途で使用され民芸品等も作られています。また幹は毛で何重にも覆われています。そのシュロの毛はどこから来るのでしょうか。葉柄の基部が筒状になって幹の全体を包んでいます。その葉柄の基部の先が繊維状になっていて、この繊維の成長したものが幹を取り巻く毛となります。葉は短い間隔で着くので、シュロの毛は幹を何重にも包むこととなります。このシュロの毛も「ホウキ」や「たわし」を作るのに使われてきました。

シュロ・シュロと見て歩くとあちらこちらに生えているのに気がつきます。国立科学博物館附属自然教育園(目黒)では1965年に数本だったシュロが2010年に2585本へ増えたとあります。地球温暖化で冬の寒さが厳しくなくなり、本州でも屋外で育ちやすくなっているのだそうです。

温暖化の影響を受けているものを拾ってみると、「富士山の森林限界は1976年以降2,500mから2,600mに移動している。」「ソメイヨシノの東京での開花日は、40年前に比べ、約10日早くなっている。また、紅葉日も50年前に比べ約15日遅くなっている。」等々出てきます。地球温暖化は現在進行中のこと、一番肌で感じているのは自然観察をしている私達ではないのでしょうか。この数十年の間に石炭、石油等の化石燃料を燃やして排出されるCO₂によって、温室効果ガスが増量され温暖化が進んでいます。CO₂排出量が増え続けるかぎり温暖化は進行してしまいます。目指せ！カーボンニュートラル！

船橋市 林信子